

公開講演会記録

生麦事件から明治維新へ

結び文化研究所 所長 小暮幹雄



皆さんが中学校や高校の日本史の授業で学んだと思います、いわゆる生麦事件が発端で明治維新へ突き進んでいったところまでのいきさつを、映像を使ってお話しいたします。初めに生麦事件が起きるまでの歴史を1600年の関ヶ原の合戦までさかのぼり、それからの主な出来事を観ていきます。

関ヶ原の合戦後

関ヶ原の合戦は、東軍の総大将は徳川家康で、西軍の総大将は毛利輝元です。戦火の結果は徳川家康率いる東軍が勝利し、その後、家康は天下を統一し江戸に幕府を開きました。戦に負けた西軍の長州藩の藩主毛利輝元は、安芸、備後、周防、長門、出雲、岩見、隠岐の7か国を

支配し、112万石を誇っていました。が、関ヶ原合戦での敗北後は、周防、長門の2か国の36万9千石に減らされてしまいました。その無念さがすべての藩士の心底にあり、そのことが幕末まで続いています。エピソードとして、毎年新年賀の儀で家臣代表が「今年は徳川を打ちましようか?」という、殿様は「いや、今年は見合わせておこう」というのが恒例で、幕末まで続いたそうです。

ペリー来航

1853年(嘉永6年)6月3日夕刻、マシュー・ペリー提督が4隻の船を率いて神奈川浦賀沖に来航し、徳川幕府に対して開港を要求しました。当時のアメリカは灯りの燃料として鯨油を使用し

ていましたので、太平洋でクジラを捕っていた捕鯨船への水や薪、食料などを調達するための港の必要を日本に求めてきたのです。幕府はすぐには開港の要求を受け入れず、回答を保留すると、ペリーは翌年に再び来るとのことです。

日米和親条約締結

1854年(嘉永7年)1月16日、再び、ペリー提督は艦隊を率いて来日しました。幕府は開港要求をやむなく受け入れて、日米和親条約を結びました。1858年(安政5年)6月には、幕府は日米修好通商条約を朝廷の勅許を得ずに締結しました。この時、反対していた吉田松陰、横井小南などの尊王攘夷派の多くは、

大老井伊直弼によるいわゆる「安政の大獄」で捕らわれて、斬首されました。1860年（万延元年）3月3日、大老井伊直弼は桜田門外で水戸脱藩浪士などによって襲撃され首をはねられました。

島津久光一行江戸へ

1862年（文久2年）4月、薩摩藩の島津久光は兵1千名を率いて上洛し、幕府へ勅使を派遣し、幕政改革を進言することを朝廷に提言しました。朝廷は勅使に大原重徳（おおはらしげとみ）を任命し、翌5月には島津久光が兵400名と共に勅使を護衛して江戸へ下向しました。江戸に着いた勅使大原重徳は幕府に對して、一橋慶喜を將軍後見職に、松平慶永（春嶽）を政治総裁職にすることを要求し、受け入れさせました。同年8月、島津久光一行は江戸三田の薩摩藩邸を発って、川崎で昼食を摂った後2時過ぎに神奈川の生麦村に差し掛かりました。そこで起きたのが生麦事件です。

生麦事件発生

当時の生麦村は東海道の道筋で、両側には185軒の家があり、その8割方は漁師で民家の裏側は畑でした。島津久光一行は川崎方向から横浜方向へと行列を

進めていました。そこへ、英国人女性を1人含む4名が乗馬で横浜方向から久光の行列方向へ進んできました。大名行列が来たら馬から降りて脇によるのが常識でしたが、4名は馬に乗ったまま行列へと進めてしまいました。

英国人4名は、チャールズ・レノックス・リチャードソン（上海で貿易商をしており、マーシャルの友人）、ウィリアム・マーシャル（横浜で生糸の輸出商）、マーガレット・ボロデイル（マーシャルの義理の妹）、ウヅジロップ・チャールズ・クラーク（ハード商会の生糸検査員でマーシャルのビリヤード仲間）です。

進行方向左側にマーガレット、右側にリチャードソン、マーガレットの10メートルほど後ろにクラーク、リチャードソンの後ろにマーシャルという隊形で進み、行列とすれ違う形になり、鉄砲組を難なく過ぎ、リチャードソンの馬が一行の列を避けて左に寄ると、マーガレットの馬に接触して道路側の溝に馬の脚が入ってしまい馬を戻そうとして、行列の中に入ってしまいました。

島津久光の駕籠の右後方に従っていた供頭の奈良原喜左衛門がこの様子を見咎めると、駆け込んで引き返せと合図しましたが、リチャードソンは理解でき

ず、後方にいたクラークは危険を感じて引き返せと叫びました。リチャードソンとマーガレットは馬を引き返そうとしたが、思うようにはいかず、2頭の馬はさらに行列に深く入り込み、行列は進行不能となってしまいました。奈良原喜左衛門はリチャードソンに「無礼者！」といって袈裟懸けで切りつけました。当時19歳の久木村治休（利休）も切りつけました。リチャードソンは馬を700メートルほど横浜方向へ走らせましたが、すぐに落馬してしまいました。そこで、もう助からないとみた当日非番供頭の海江田武次が畑の中に引き入れて「許せよ、今に樂にしてやるから」と喉を一突きし、止めを刺しました。

他の3名は手傷を負ったものの命には別条なくアメリカ領事館のある本覚寺に逃げ込みました。アメリカ領事館では、近くの宗興寺で医療活動をしていたアメリカ人のヘボン医師（1815～1911年）を呼びよせて3名の治療に当たらせました。

ヘボン医師

ヘボン医師は、1815年ペンシルベニア生まれの宣教師で1859年（安政6年）にクララ夫人と共に来日し、神

奈川宿の成仏寺に住まい、宗興寺を施療所として医療活動が無償で行っていました。ヘボン医師は正式にはジェームス・カーティス・ヘップバーンといいますが、呼びやすくヘボンと言われており、漢字表記では「平文」とされています。ヘボンは信仰するキリスト教を日本に広めるためには日本語を勉強する必要を感じていました。そこで、ヘボンは日本語を英語でどのようにいうかを小まめにメモに取り、7年かけて日本初の和英辞書『和英語林集成』を編纂しました。この編纂には岸田吟香が支援していました。岸田吟香の息子が画家の岸田劉生です。ちなみにこの『和英語林集成』を幕府は300冊購入したそうです。当時の日本にはローマ字の活字がありませんでしたので、印刷は上海で行いました。

ヘボン塾の塾生

ヘボンはまた、クララ夫人と共に横浜で英語を教える「ヘボン塾」を創設しています。第1期生には林董（はやしただす）がおりました。林董は順天堂の創始者の佐藤泰然の5男で、若くして林洞海（はやしどうかい）の養子となりました。親戚筋の榎本武揚と共に箱館戦争で戦いましたが、榎本と共に降伏しました。しばらくして明治政

府に請われて、明治4年には岩倉使節団の通訳として同行し米欧を視察してきました。後には、英国公使として日英同盟を工作し、帰国後は外務大臣にまで上り詰め伯爵の爵位を賜りました。また、ヘボン塾生には内閣総理大臣を務めた高橋是清や三井物産や後の日本経済新聞の創設者の益田孝がおります。私事で恐縮ですが、母校の明治学院はヘボン塾がルーツで、今年で156周年です。

江戸幕府へ報告

島津久光一行は、神奈川宿で休息を取る予定を返上し、足早に保土ヶ谷へと向かいました。幕府へ報告するために、山口金之丞を三田藩邸へ差し向けました。三田藩邸で報告を受けた留守居役の西筑右衛門は、翌日書状をもって「リチャードソンほかに危害を加えたのは、足輕の岡野新助という人物であって、馬で逃げた3人を追って、その後、行方不明である」と幕府に報告しました。岡野新助という人物は全くの架空の人物です。

生麦事件賠償金

事件から5か月後、代理公使ジョン・ニールの事件に関する報告書に基づき、ラッセル外務大臣より、幕府に対して賠

償金が要求されました。この時、第14代将軍家茂は上洛中で江戸を留守にしていたため、老中格の小笠原圖書頭長行は、独断で10万ポンドの支払いを1863年（文久3年）5月9日に完了し、英国との戦争になるのを回避しました。

英国側は薩摩藩に犯人の処刑と遺族への賠償金2万5千ポンドを3月8日まで収めよという要求をしました。薩摩藩はあくまでも犯人は行方不明であると押し通し、賠償金の支払いには応じませんでした。そこで、英国は、艦船7隻を鹿児島湾へ差し向けて鹿児島市内を砲撃しました。これがいわゆる「薩英戦争」です。英国艦隊は油断して岸边に近づき、薩摩藩砲台の射程距離内に入った旗艦ユーリアラス号は激しく被弾し、艦長ジョスリング大佐と副艦長ウィルモット中佐が戦死しました。英艦のアームストロング砲やロケット弾により、薩摩藩の諸砲台は破壊され、鹿児島市街に大火が発生しました。英国外務省の発表によれば、英国は死者11名、負傷者39名。『薩藩海軍史』によれば、薩摩藩は死者5名、負傷者13名とのことです。薩摩藩は賠償金2万5千ポンドを幕府から250年間で返済するとして借用し、英国側へ支払い講和しました。

下関戦争勃発

長州藩は、1863年（文久3年）、攘夷実行という大義のもと、馬関海峡（現関門海峡）を封鎖し、航行中の米仏商船に対して砲撃を加えたため、1864年（元治元年）、英国、仏国、蘭国、米国の4か国連合艦隊は長州藩の砲台を攻撃し、高杉晋作率いる奇兵隊などと銃撃戦を繰り広げ、約2千名の兵士を上陸させ、砲台を占拠しました。この「下関戦争」で長州藩も外国の威力の凄まじさを身をもって体験しました。

薩長同盟締結

薩摩藩は近代化を進めて軍備を整えてきましたが、この薩英戦争や下関戦争で欧米列強との軍事力には格段の差があることを実感させられました。薩摩藩は、国家を統一しなければ、欧米列強には対抗できないとし、尊王討幕思想を一層強固にし、長州などと手を組んで討幕へと進んでいきました。1866年（慶応2年）、薩摩藩と長州藩が坂本龍馬の仲介により、いわゆる「薩長同盟」を結び、明治維新へと大革命を5年で成し遂げ、今日に至りました。

日英同盟締結

薩英戦争で薩摩藩の天祐丸と青鷹丸が英国側に拿捕された際に、捕虜となった松木弘安（後の寺島宗則）と五代友厚は、英艦隊が横浜に着くと釈放されました。五代友厚は、英国と薩摩の国力の差は計り知れないと感じ、英国に学ぶために留学生を派遣すべきとの「注進書」を藩庁へ提出しました。英国も薩摩藩へ好意を示し、幕府の禁令を犯して薩摩藩の使節と留学生の受け入れを認めました。

薩摩藩は1865年（慶応元年）4月に長崎にいたトーマス・グラバーが用意した蒸気船オースタライエン号で、新納久脩（にいろひさのぶ）、松木弘安、五代友厚と通訳4名の使節と15名の留学生を英国へ派遣しました。帰国後、五代友厚は大阪商工会議所を創設して初代会頭となり、松木弘安は外務卿（外務大臣）となりました。薩摩藩からの使節や留学生たちは、明治政府の外交、軍事、経済などの分野で活躍し、日英関係を緊密化し、日本海軍を英国海軍式に育て、日英同盟を締結するまでに日英両国を結び付けました。

1865年（慶応元年）、長州藩には、正義派政権が誕生し、武装恭順を唱えて

抗戦の姿勢を見せたため、第14代將軍徳川家茂は同年5月に大阪城に入りました。そして、9月には長州再征の勅許を得ました。この時、京にいた薩摩藩士の大久保利通らは、長州再征は諸侯会議を開催したうえで決めるべきとしましたが、朝廷を擁した一橋慶喜に阻まれました。そのため、大久保利通は長州再征の勅許を「非議の勅命は勅命に在らず」と憤慨し、以後、薩摩藩は長州藩との提携を加速させていきました。

第2次長州征討

1866年（慶応2年）、幕府は長州藩の10万石の削封と藩主毛利敬親の隠居などの処分を決定し、長州藩に到達しました。そして、紀伊藩主徳川茂承を先鋒総督に任じて西国32藩に出兵を命じましたが、この時すでに、薩長同盟が成立しており、薩摩藩は幕府に対して出兵拒否を申し入れました。幕府が長州藩に提示した回答期限を過ぎても長州藩からは回答がなかったために幕府軍は総勢15万の軍で四方から総攻撃を開始しました。対する長州藩の兵力は、高杉晋作率いる奇兵隊ら長州諸隊を中心に数千人でありましたが、最新の洋式兵器を備えており、大村益次郎らの軍制改革で精鋭に育って

いました。一方、幕府の命で参戦した諸藩の多くは、第2次長州征討は、幕府と長州の私闘とみていたため、士気が上がりませんでした。そのため、幕府軍は各地で長州藩に敗北を重ねていきました。

連戦連敗の続く中、大阪城にいた将軍家茂が病死してしまいました。将軍家茂には子がいませんでしたので、一橋慶喜は、1866年(慶応2年)8月に徳川宗家を継ぐことになりましたが、しばらくの間は将軍職に就くことを辞退していました。これは、長州に大敗した直後の幕府を背負うことは得策ではないと判断したからであると思われます。しかし、同年12月5日に慶喜は第15代将軍に就任しました。

大政奉還を奏上

1867年(慶応3年)には討幕勢力が台頭しつつあり、前土佐藩主の山之内豊信(容堂)は、幕府による独裁には反対しつつも、討幕派と幕府の武力衝突を回避する案を模索していました。後藤象二郎は海援隊隊長の坂本龍馬と長崎から京都へ向かう船中で、坂本龍馬から大政奉還論などの「船中八策」を示されました。後藤象二郎は「船中八策」をもとにした大政奉還論を藩主豊信を通して徳川

慶喜に建白しました。将軍慶喜は、大政奉還論を受け入れました。

将軍慶喜は、条約勅許と兵庫開港勅許を得て通商条約の欠陥を補完した後、大政奉還を断行しました。1867年(慶応3年)10月12日、老中以下、在京の幕府諸役人が二条城に集い、慶喜から大政奉還の決意が告げられました。翌13日には、在京諸藩の10万石以上の大名を招集して、京都所司代桑名藩主松平定敬が「大政奉還上表文章稿」を示して説明しました。翌14日には、将軍慶喜の命令で高家の大沢右京大夫基寿が参内し、「大政奉還上表文」を提出しました。

坂本龍馬、中岡慎太郎暗殺さる

土佐藩を脱藩した坂本龍馬は、大政奉還後の約1か月後、中岡慎太郎と共に京都近江屋で惨殺されました。高杉晋作から譲られたピストルを使う間もないほど、突然の襲撃でした。龍馬襲撃の犯人は京都見廻り組であるという説が有力ですが、新撰組説や薩摩藩など意外な勢力が黒幕であるという説もあり、日本史上最大の謎の1つに挙げられています。

王政復古の号令

大政奉還によって、徳川慶喜は見事に

討幕派の機先を制することに成功しました。薩摩、長州、芸州による討幕挙兵は中止され、さらに朝廷からは当面の政権を委任されることになりました。朝廷側には政権を運営する力はなく、大政奉還後には再び政権を任されるであろうという慶喜の読みが的中しました。岩倉具視は王政復古論をもとにした宮中クーデターとして、慶喜の裏をかくて王政復古を宣言し、朝廷を中心とした新政権を樹立する計画を立てました。

1867年12月9日、西郷隆盛が指揮する薩摩藩兵が中心となり、越前、芸州、尾張、土佐の藩兵が御所に通じる9つの門を閉鎖しました。岩倉具視は明治天皇の勅許を得て王政復古を宣言しました。ここに、天皇を中心とした新政府が誕生し、260年以上続いた江戸幕府は終わりを告げました。

鳥羽伏見の戦い

王政復古のクーデター直後に開かれた小御所会議で失脚した徳川慶喜は、大阪城へと退きました。しかし、前土佐藩主の山之内豊信(容堂)ら公議政体派が慶喜の擁護に転じると、慶喜は議定就任が内定するまで復権しました。これに危機感を抱いた薩長両藩は、武力を行使し、

西郷隆盛が送り込んだ薩摩藩士益満休之助らに命じて、江戸の街で強盗や放火、辻斬りや略奪などを繰り返し、慶喜を挑発しました。江戸の街の治安を受け持っていた庄内藩が三田の薩摩藩邸を砲撃しました。1868年（慶応4年）1月1日、慶喜は薩摩藩を討伐する「討薩の表」を発し、新政府軍との武力抗戦を決意しました。

会津藩、桑名藩を中心とした総勢1万5千もの旧幕府軍は、京都に向けて進軍。迎え撃つ新政府軍は、薩長両藩を主体とする約5千人が出兵。鳥羽・伏見で激しい戦闘を展開しました。征討大將軍に任命された仁和寺宮嘉彰親王が、朝敵を征伐する際の官軍の旗印である錦の御旗（錦旗）をひるがえすと、状況は一変し、新政府軍には土佐藩が加勢し、津藩も旧幕府軍から寝返るなど、新政府軍が一気に攻勢に転じると、形勢不利と見た慶喜は、ひそかに大阪城から江戸へ船で逃亡しました。これを知った旧幕府軍は瓦解し、戦闘は終結しました。

江戸無血開城

鳥羽・伏見の戦いで旧幕府軍を破った新政府は、江戸に逃亡した徳川慶喜に対して追討令を発布しました。有栖川宮熾

仁親王を大総督、西郷隆盛を参謀とする東征軍を結成し、1868年（慶応4年）3月15日を江戸総攻撃の日と定めました。しかし、抗戦を断念した慶喜は、すでに上野寛永寺で謹慎しており、後事を託された勝海舟が、江戸における戦闘回避と、徳川家存続に向けて奔走していました。3月9日、勝は西郷のもとに旧幕臣の山岡鉄舟を遣わし、会談を申し込みました。西郷は会談を受け入れ、3月13日、江戸の薩摩藩邸にて勝と西郷の会談が実現しました。2日間にわたり話し合いが行われ、旧幕府側の武装解除や江戸城の明け渡しを条件に、徳川家は存続することができるようになりました。慶喜の水戸での謹慎も決まり、新政府軍による江戸の総攻撃は中止となりました。総攻撃が回避された背景には、江戸の街が戦火に包まれることで、日本との貿易に支障が出ることを危惧したイギリス公使のパークスが、新政府に圧力をかけたともいわれています。また、勝が西郷を説得して、無血開城が実現した背景には、大奥の活躍があり、薩摩藩主の養女であった天璋院（篤姫）と、孝明天皇の皇女であった和宮は、徳川家を守るために、それぞれ自殺を図ることをほめかしてまで薩摩藩と朝廷を説得したことも

あり、無血開城が実現したわけです。

上野戦争

1868年（慶応4年）4月、江戸の無血開城が決まったものの、旧幕臣の中には、新政府軍との抗戦を唱える主戦論者も少なくなく、徳川慶喜の復権などを目指して結成された彰義隊は、旧幕府首脳から江戸市中取締に任命されると、慶喜が謹慎している上野寛永寺を拠点に、江戸の治安維持に奔走しました。慶喜が水戸へ移った後も上野に残ると、新政府に不満を持つ旧幕臣や諸藩の志士らを吸収して、総勢3千人を超える組織へと発展しました。慶喜と共に江戸からの退去を訴えた頭取渋沢成一郎が脱退し、主戦論者の副頭取、天野八郎が隊の実権を握ると、新政府も彰義隊に対する警戒を強めました。新政府の東征軍参謀の西郷隆盛は、彰義隊に対して何度も武装解除を要求するも、逆に彰義隊と新政府軍の兵士により小競り合いが頻発しました。この状況を見た新政府は、指揮官として大村益次郎を上野に派遣し、寛永寺を包囲して総攻撃を決定しました。佐賀藩が製造したアームストロング砲を投入するなど、新政府軍の圧倒的な兵力の前に、彰義隊はわずか1日で壊滅しました。ちな

みに、大村益次郎（旧姓村田蔵六）は横浜のヘボン塾で英語を習いました。

奥羽越列藩同盟成立

鳥羽伏見の戦いの後、新政府は徳川慶喜追討と並行して全国平定を開始し、九条通孝を奥羽鎮撫総督に、長州の世良修蔵らを参謀に任じて仙台に派遣し、東北諸藩に佐幕派の雄藩である会津藩、庄内藩の征伐を命じました。会津藩や庄内藩に何の恨みもなく、また、成立したばかりの新政府の命令に従うべきか決めかねた東北諸藩は、仙台藩を中心に会津、庄内救済の嘆願書を提出し、平和裏に事を解決しようとした。ところが、会津征伐を譲らない世良修蔵がこの嘆願書の受け取りを拒否すると、東北諸藩は新政府との対決姿勢を強めることとなり、ついには仙台藩士らによる世良殺害事件に発展しました。

奥羽鎮撫の参謀の世良を殺したことから、東北諸藩と新政府との対立は決定的となりました。1868年5月には仙台藩を中心とした東北25藩が奥羽列藩同盟を結成し、すぐに長岡藩など越後6藩も加盟し、奥羽越列藩同盟となりました。各藩の思惑は必ずしも一致せず、そのため、東北諸藩へ戦火が及び、戦局

が新政府軍に優勢に傾くと、降伏して同盟から離脱する藩が相次ぎました。

会津戦争

新政府によって朝敵の汚名をきせられた会津藩主松平容保は、鳥羽伏見の戦いで徳川慶喜と共に江戸へ敗走したのち会津へ帰り、庄内藩と同盟を結びました。上野戦争が一段落した1868年5月以降、新政府軍の東北進攻は本格化しました。会津藩は圧倒的な兵力差をもとめせず、各地で善戦しました。しかし、7月に奥羽越列藩同盟の1つである二本松藩が新政府軍によって攻め落とされると、板垣退助らの率いる新政府軍の主力は会津藩の拠点である鶴ヶ城を目指しました。8月末には鶴ヶ城が包囲され、会津藩士や家族らは壮絶な籠城戦に突入しました。新政府軍の火力の前に多くの犠牲者を出し、弾薬も食料も尽きた会津藩は、約1か月後の9月22日に降伏し、会津戦争は幕を閉じました。

明治と改元

1868年（慶応4年）4月、江戸城無血開城の会談で、旧幕府の武装解除が決定した後も、旧幕府海軍副総裁であった榎本武揚は、徳川家に対する処置を不

服として、新政府への軍艦引き渡しを拒否し、同年8月には新政府に不満をもつ旧幕臣とともに、「開陽」「回天」など旧幕府の軍艦8隻を率いて、江戸を脱出しました。途中、仙台に寄港すると、大鳥圭介や土方歳三など会津戦争で生き残った旧幕府軍の兵士らと合流しました。総勢2500人もの勢力となり、蝦夷地へ向けて出港しました。

10月、蝦夷地に上陸した榎本軍は、箱館に進軍し、新政府の箱館知事がいた五稜郭を占領しました。11月に蝦夷地を制圧し、12月には、箱館で蝦夷共和国の自立を宣言しました。選挙によって初代総裁に就任した榎本武揚は、新政府に新国家の承認を求める嘆願書を提出しましたが、新政府はこれを拒否し、蝦夷地平定を目指して政府軍を派遣しました。

兵力に勝る新政府軍は各地で圧勝し、1869年5月には箱館に上陸。新政府軍の艦隊が砲撃を開始すると、追い込まれた榎本軍は5月18日に降伏しました。新政府軍は戊辰戦争を終結させるとともに、全国を平定しました。

ヘボン塾の1期生の林董も榎本武揚に従って、箱館戦争で戦いましたが、榎本と共に降伏し、江戸へ送られました。その後、英国公使館で通訳となり、明治4

年には岩倉具視の米欧派遣使節団に同行しました。新政府は1868年（慶応4年）9月8日に元号を明治に改元しました。

廃藩置県

明治新政府は、江戸時代の封建的支配体制から脱し、中央政権による近代的な統一国家の建設を目指し、その第1段階として、1869年（明治2年）1月には、薩長土肥の4雄藩が領地と領民を朝廷に返す版籍奉還を行い、6月にはすべての藩にも版籍奉還を命じました。藩主は知藩事に任命され、石高の代わりに家禄を与えられたため、実質的には藩体制が存続したままでした。一方、明治政府の直轄領（旧幕府直轄領）では、厳しい年貢の取り立てなどに反対する一揆が頻発し、誕生したばかりの政府を脅かしました。このような状況を打開するためにも明治政府は、1871年7月、一気に藩体制を廃止する廃藩置県を断行することになりました。

岩倉使節団

1871年11月、岩倉具視を全権大使とした使節団が1年10か月にわたる外遊に出発しました。この使節には大久保利

通、木戸孝允、伊藤博文らの明治政府首脳が派遣されました。

使節団の目的の1つは、旧幕府が欧米諸国と結んだ日米修好通商条約など不平等条約の改正予備交渉にありましたが、各国との交渉は不調に終わりました。もう1つの大きな目的であった欧米の制度や文物の調査研究に関しては、『特命全権大使米欧回覧実記』からその様子を知ることができますが、欧米の先進文明に触れた使節達は、富国強兵と殖産興業の必要性を痛感し、帰国後の政策に影響を与えました。

明治政府の重要人物たちが欧米の先進文明を直に見聞してきた意義は大でありました。しかし、国家の黎明期に政府首脳が多くが国を離れたことによる問題点もありました。大久保利通らは、国内に留まった西郷隆盛らの政府要人に対して、新たな国内改革を控えるように釘を刺しましたが、その約束は守られませんでしたが。徴兵制度や地租改正が進められていたために、使節団が帰国後、政府内では外遊組と留守政府が対立することになりました。

翻ってみれば、生麦事件が近代国家成立のきっかけになったことは歴史的に重

要な意味を持つと言えます（2019年9月5日・公開フォーラム）

筆者略歴（こぐれ みきお）

1945年東京都中央区生まれ。68年明治学院大学社会学部社会学科卒業。64年ボーイスカウト海外派遣団員として米国へ派遣。97年永年の功勞により、ボーイスカウト日本連盟2級功勞章「たか章」を受章。2005年早稲田大学第一文学部にて博物館学芸員資格取得。06年韓国、中国の青少年教育施設視察指導者派遣に参加。同年The International Guild of Knot Ties総会（英国）に出席。以後、毎年出席。17年日本文化振興会より最高功勞賞「国際アカデミー賞」受賞。ボーイスカウト日本連盟出版委員、広報委員、リーダートレーナー、東京連盟副コミッショナー、理事、地区委員長を歴任。